

組織神学

川島堅二著『F・シュライアマハールにおける弁証法的思考の形成』

(本の風景社、二〇〇五年、三六九頁)

水谷誠

川島堅二氏は、長年にわたって、フリードリヒ・D・E・シュライアマハール(一七六八—一八三四)の多方面にわたる業績の究明に従事され、今回、彼の思想に通底して認められる「弁証法的思考」、つまり対立軸を融合することなく、その緊張関係の中に揺らぎとして現れるものに意味を見出す彼の思考方法に焦点を当てて本書をお纏めになった。これは、二〇〇三年一〇月に東京大学大学院人文社会学系研究科に提出、受理された博士(文学)学位論文を公刊したものである。まずは、邦文で接することのできる数少ない本格的なシュライアマハール研究の一つとして、また最新のものの一つとして我が国におけるシュライアマハール研究に大きな刺激を与えるものであるうことを期待し、川島氏の労に敬意を表したい。

全体は、四部に構成されており(序論、第一部、第二部、第三部)、それぞれは生涯を画する四つの時期に対応している。序論は一七九六年以前、第一部は一七九六年から一八〇〇年まで、第二部は一八〇一年から一八〇六年まで、第三部は一八〇七年から一八三四年までを扱う。第一部は「直観期」、第二部は「批判期」、第三部は「体系期」という表題が付けられている。それぞれの時期では、最初に伝記的案内をなし、それに続いて重要と思われる著作を取り上げ、その周辺環境の案内、関連する思想家の案内、比較、さらに直接にシュライアマハールのテキストに語らせるといふ手法を通してその時期のシュライアマハールの思考の特徴、問題意識を浮き彫りにする。その際に、シュライアマハールの書簡をも利用して、背景の理解、精神的文脈の理解を容易にしている。もつとも、この時期区分は「あくまでも便宜的なものに過ぎ」ず、「思

想内容の根本的な転換を表すものではない(三〇頁)と言う。

序論では、課題を提示し、研究史を瞥見した上で、「直観期」にいたるまでのシュライアマハールの精神的遍歴を取り上げる。まず、幼少期の家庭生活に始まり、ヘルンフォート兄弟団の学校での寄宿舎生活に生じた精神的葛藤を案内し、さらに父親を説き伏せて進学したドイツ啓蒙の中心地ハレ大学での修学の時代、その後の、シュロピツテンの城館での家庭教師時代の体験と著述活動を取り扱う。そしてシュライアマハールが対論の相手とした、彼の哲学上の師エーバハルト(ハレの講壇哲学)、エーバハルトの論敵カント、そしてヤコービ、スピノーザとシュライアマハールとの折衝を案内する。川島氏は、この時期に「形而上学の萌芽」を認め、それは後期ベルリン時代の「六回に渡る弁証法講義において本格的に開花する」ものだとする(六一頁)。

第一部の「直観期」は、ベルリンのシャリテ付牧師として活動した時代を扱う。この時代にシュライアマハールはヘンリエッテ・ヘルツのサロンに出入りし、また初期ロマン派のサークル、とりわけフリードリヒ・シュレーゲルと親交を結ぶ。ここでは、宗教と倫理という二つの主題をめぐるシュライアマハールの思想世界を明らかにしている。まず、『宗教論』初版を取り上げ、宗教の本質(第二講)、社交(第四講)、個性化(第五講)の理解を分析、案内する。さらに、『宗教論』

に加えて、『独白録』、『アテーネウム』所収の「高貴な女性のための理性のカテキズム構想」、シュレーゲルの小説「ルツインデ」を批判的に擁護した「ルツインデ親書」を取り上げ、倫理的側面から人間性や愛の概念を取り上げる。そして、『宗教論』初版は不完全な断片的言説によつてではあるが、後のシュライアマハールの神学、解釈学、倫理学へ結実する萌芽を含んでいる(八八頁)ことを指摘し、「倫理的努力によつてのみ克服可能な他者との間の分裂状態」(二二〇頁)に対するシュライアマハールの関心が高く、シュライアマハールは、「有限性の思想家」として「人間性の闇の部分」を承認しつつ、「啓蒙の批判的理性」でもつてこの問題に取り組みもうとしたとまとめる(一二二頁)。

第二部の「批判期」では、ドイツ観念論の哲学思想家とシュライアマハールを対比させてその思想的特徴を明らかにする。シュライアマハールは、シェリングとは異なり、「対話は学問自体の基本的性格」(二四五頁)だと見なしていたこと、また「一般に『感情』という概念から予想されるものとは異なった宗教固有の感情」(二七三頁)に着目していたことを、シェリングの『学問論』へのシュライアマハールの書評や、三頁を割いた『宗教論』第二版と初版の比較を通して指摘する。さらに、カント、フィヒテに対するシュライアマハールの理解を「従来の倫理学説批判綱要」の分析を通して明らかにし、「倫理学はもはや当為の倫理学ではなく、存在の学、す

なわち、諸々の現実の倫理的行為の学」（一九〇頁）として構想されていると指摘する。そして同じ「弁証法」という用語を使ったヘーゲルに対して、シュライアマハの独自性は「有限者の次元で『個』としての他者を、もう一つには無限者としての他者を、あくまで保持」（二〇三頁）しようとしたことにあり、続いて、自然学と倫理学の共通の根拠である最高の学問を求めたプラトン、「発見的、対話的特徴」を持つプラトンをシュライアマハが支持したことを挙げ、この時期に「諸学を基礎付け、関連付ける包括的な学としての『知識学』の構想が明確にされた」（二一三頁）と締めくくる。

最後の第三部、「体系期」では、ベルリン学術アカデミー会員としての権利を行使してベルリン大学哲学部で行った合計六回にわたる「弁証法」講義の分析に集中する。このヘーゲルの『精神現象学』に比肩する難解さを持つ講義の分析は、二〇〇二年に刊行された批評版全集（KGA）所収の最新の「弁証法」校訂版を基礎テキストにしている。この校訂版には、それまでは公にされることのなかったテキストや聴講者のノート類を含んでおり、シュライアマハの弁証法、学問体系に関する今後の研究にとって基礎テキストとなる質を備えている。川島氏はこの校訂版に基づき、従来のように、一八一四／一五年、および一八二二年の講義ではなく、一八一一年になされた最初の講義がその後成熟、展開する講義の土台となっていることを指摘し、それを弁証法的思考方法を確認

するにふさわしいテキストだと判断する。その上で、後の展開に認められる異同を確認しつつ、弁証法的思考方法がそれ以降の講義の中で具体的に言表されていく過程について、注意深く「絶対者」「神」「世界」といった概念を二七頁にわたって分析することを通して明らかにする。そして「結論的考察」で、シュライアマハの「弁証法自体に一元的な体系があるのかどうか」（二八七頁）という問いを提出し、「弁証法が提示する『知』は、『世界』という『終点』に漸近線的に（したがって無限に）接近し生成し続ける知、未完の知」（三一七頁）であり、これの内実は『思考と存在』『観念と実在』『神と世界』の『共存』『二極共振』（三一八頁）であるとして、シュライアマハの弁証法的思考の独自性を包括的に言い表す「生の弁証法」という概念を導入して本書は完結する。以下、いくつか絞って書評者の視点から本書の意義と問題点を申し述べたい。

まず最初に高く評価すべきことは、邦語ではほとんど取り扱われることのなかった「弁証法」講義の分析を本書の中軸に置き、最新の校訂テキストに基づきながら解読を試みたことである。シュライアマハの学問世界は、言わば二重構造をなしており、一般的世界知としての学問の世界を土台にし、それを媒介手段ないしは道具としつつ、キリスト教会の指導を図る「実定的学」たる神学が営まれるのであるが、世界知としての学問諸分野を提示し、その相互連関を形式的に基礎

付ける「弁証法」講義を無視しては、神学を含むシュライアマハーの学問世界の全貌を把握することはできない。これを真正面から取り上げた本書によって、邦語でのシュライアマハー研究は新たな段階に差しかかったと言つてよい。今後は、シュライアマハーの個別の言説を扱う場合でも彼の思想の全体を視野に入れた総合的な判断が求められることになるであろう。本書はその意味でシュライアマハーの学問世界に適切に入り込むための道筋を提示したものである。

次に、この「弁証法」講義に表れた「生の弁証法」が彼の活動全般に行き渡っていたことを明らかにするために、川島氏は、シュライアマハーの生涯を四期に分けて、その全体を俯瞰する。つまり、シュライアマハーは、ベルリン大学に赴任して以来、彼の学問を方法的体系的に整備することを目指して、この講義を繰り返してきたのであるが、そこに結実する著者言うところの「生の弁証法」は、大学での講義の一つである「弁証法」に単に留まるのではなく、既に若い時代の思想的営為に現れており、そればかりでなく、シュライアマハーの生涯の全体に一貫して見られると指摘することで、包括的にシュライアマハーの思考方法自体に見られる特徴としてそれを提示したのである。川島氏はこの課題に挑戦して「生の弁証法」という概念を導入したと言える。書評者は、基本的に、シュライアマハーの生涯にわたって弁証法的思考方法が認められるという川島氏の主張を承認するものであ

り、ここにシュライアマハー理解のための重要な視点が提供されることになった。

第三に注目すべきは、日本では顧みられることのなかった各時期のシュライアマハーの重要なテキストを取り上げて、そのテキストが語ることを紹介しつつ自説を補強したことである。それらのテキストとして、六回にわたる「弁証法」講義（一八一―一八三一年）のテキストならびに聴講者の筆記録の他に、一七九八年の「高貴な女性のための理性のカテキズム構想」、一八〇〇年の『ルツインデ親書』、一八〇三年の『従来倫理学説批判綱要』、一八〇四年のシェリング『学問論』の書評、一八〇六年の『宗教論』第二版（『宗教論』の邦訳は六種あるが、そのすべては初版に基づいている）、さらに多量の書簡などを挙げることができる。シュライアマハーの豊饒な思想世界を明らかにするために、視野を拡大した本書の貢献は大きい。

さて、本書のプログラムは、私見では、同時に問題点をも合わせ持っている。以下、書評者の視点からコメントを挟みたい。

ヴィルヘルム・ディルタイは「シュライアマハーの生涯」（一八七〇年）の序文に有名な言葉を残した。「カントの哲学は彼の人となり、彼の生涯に立ち入って取り組むことをしなくとも完全に理解することができる。シュライアマハーの意義、彼の世界観、彼の業績は、それを徹底して理解するため

には伝記的叙述を必要とする」。この見方に基づいてデイルタイは、シュライアマハの伝記的研究に赴き、シュライアマハの生きた当時の環境世界を描写し、多様な精神的潮流との対話を叙述し、それらを引き合いに出しつつシュライアマハの思想世界を浮き彫りにすることを試みた。この古典的研究はその後一世紀に及ぶシュライアマハ研究を規定してきたが、一九八〇年以来批評版全集（KGA）が公にされ、基礎となるテキストが整備されていく中で、デイルタイとは方法的に異なる研究が登場してきた。それは、伝記的にシュライアマハの活動を追い、また関連する諸思想家との比較検討をするという、言わば、傍証を多用し外堀を埋めていくデイルタイの方法に対する反省から生まれてきたものであり、テキスト自体に現れたシュライアマハの思想の読み取りに集中して取り組もうとするものである。このような研究を代表するものに、初期シュライアマハのテキストの分析に集中し、そこに現れている思想の解明を志した、メッケンシュトゥック（G. Meckensstock）の業績（一九八八年）がある

が、それは本書には言及されていない。著者の参照するものの中には、比較的最近に公刊され、新たな研究への橋渡しの役割を果たしたヘルムス（E. Helm, 著者はハームスと表記）の研究（一九七四年）もあるが、それでさえ、批評版全集の新たなテキストが目の目を見る以前の業績として、研究者の視点をテキスト解釈に反映させて、不完全なテキストの行間

を埋める傾向が強いと言われる。本書の叙述はデイルタイ的な手法を踏襲して、多彩な視点からシュライアマハの思想を語る傾向が強いが、一般に第二部までの本書の論述に参照利用されている諸研究には、残念なことに、方法的にデイルタイ的枠組みを背景にして著わされた古いものが多く、また最近の重要な研究を見逃している。

これと好対照をなすのが、新しい研究文献を多く取り入れて、著者が精力を傾注した第三部の論述である。しかし、これは別の、ないしは逆の問題を孕むと思われる。川島氏はシュライアマハの弁証法は体系なのか否かという問いを立て、そこに「首尾一貫した体系を認めることは、単純にはできない。むしろ一つの体系にまとめあげられない所に、弁証法の弁証法たる所以がある」（二八八頁）とした上で、結論として弁証法の知は「未完の知」（三一七頁）であり、それは「生の弁証法」と言うにふさわしいと言う。そもそも川島氏が何をもって「体系」と定義するのは不分明であるが、それはさておき、このテーゼを追求するにあたって、たとえば、アルントの研究を一元論に傾いた解釈、キンマーレの研究を二元論に傾いた解釈と見なした上で、それらに対してどちらが正鵠であるのかという「二者択一」的な判断を下さずに、両者はシュライアマハの弁証法のそれぞれの一面を捉えているにすぎないと見なし、それらを包括する概念こそ「生の弁証法」であると主張する。しかしこの両者の研究は、私

見では、むしろ「生の弁証法」的思考方法がシュライアマハ
ーにあることを前提にした上で、さらに詳細にその事態を突
き止めようとしたものである。それにもかかわらず、川島氏
はそこにさらに立ち入るのではなく、逆に包括的定義として
の「生の弁証法」に留まろうとする。

いずれにしても、我々は本書が提起したことを前提にして、
今や、安んじてその個別の吟味、検証作業へ、そこからさら

にシュライアマハの学問的、思想的世界の解明に赴くこと
ができるようになったのである。最後になったが、聴講者の
筆記ノートで補強し、さらに著者の注釈を加えた一八一一年
の「弁証法」講義の邦訳（抄訳）を掲載した補遺は、少なく
とも邦語で接し得る「弁証法」講義の唯一の紹介であり、そ
の意義は特筆に値することを付記しておく。